



第一章

特集 人つなぐ
未来へ

Special Article:
Linking People for a Brighter Future

Special Article
特別企画

つながる *Linking People for a Brighter Future* 未来へ

S m i l e s o f c h i l d r e n a r e

特集 1

山 学校 で教える 先生

*The teacher of
Mountain(Nature)
School*

当たり前のことを、
子供たちに
伝えたい。



w h a t m a k e t h e f u t u r e !

長濱 眞盛

(ながはま・しんもり)うるま市宇堅在住。
64歳。保護司。市職員を定年後、山学校「う
りずん」を発足。子どもたちに、勤労生産体
験や天願川での自然体験を通して、自然の
営みや生活の知恵を伝授している。

子供たちの笑顔が、
未来をつくるんです。



地域の子どもは 地域で育むことが大事

もともと活動を始めたきっかけは、地域の子どもたちへサッカーを指導していたこと。

「今の子どもは買い与えられたものでしか遊ぶことができない。でも昔はそうではなく、自分が暮らす地域の自然からたくさんの遊びを考え出した。ありのままの自然に触れることで、その良さも怖さも体験できる。その中から、柔軟性や危険を回避する自己管理能力を自分なりに体得してきたものです」

長濱さんが地域にこだわる理由は彼の生い立ちも大きくかかわっているようです。

「私自身幼少期に父親を戦争で失くしたこともあって、地域のみなさんに育ててもらいました。地域の方々から多くの知識を与えられました。いろんな人とかかわることでその人が持っている知恵も身に付けたものです。地域への恩返しでしょうか私も、地域の子どもたちへできる限り手を添えたいのです。私の使命かもしれませんね」

参加した子どもたちが成人し、再度訪れることも多く、「私の子どもはもう何百人もいますよ」と笑顔を見せる長濱さん。

自宅の農園を開放し 子どもたちに自然体験を

市内の自宅に隣接する600坪の農園で、勤労生産体験、天願川の自然体験を通して、子どもたちに自然の営みや暮らしの知恵を伝授する長濱眞盛さん。20年ほど前から活動を始め、市職員を定年退職した後の平成13年に山学校を発足。今では年間約3000人の子どもたちを受け入れているといいます。

「小中学校の総合学習の授業だったり、個人や地域の子ども会の活動だったり、たくさんの子どもたちが参加します。素足で行う野菜の種まきや収穫、天願川での小動物との出会いなど、初めての経験に子どもたちはとても喜んでくれます」



一つ一つの体験を 未来につなげたい

「天願川に入ったときの子どもたちの笑顔は、とても輝いているんですよ。参加する子どもはみんな同じ表情をします。そんな彼らの笑顔を見るにつけ、私の活動は間違っていないと実感するんです」

体験学習の様子についてそう話す長濱さん。実際、何度となく参加する子どもたちもいるそう。

「将来を担う子どもたちに対して私ができることは、彼らの感動を一つ一つつないでいくこと。その場限りで終わらせない体験をしてもらうことで、地域の風土にも愛着を持って未来にも残していくことができると思います」

data:

山学校「うりずん」

電話／098-973-7467

【マーラン船】

マーラン船（山原船）は、戦前まで沖縄で貨物の輸送船として使われていた木造船のこと。琉球大交易時代、中国や東アジアと交易を行っていたころの進貢船に由来するとも言われています。



A n c e s t r a l k n o w l e d g e

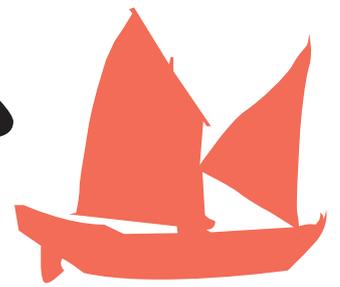
特集 2

マラン船は

親子4代を
つなぐ

夢

の船



*The Marlan ship is the ship of dream
that connects four generations of
parents and children.*

先人から受け継いだ
知恵と技を
伝えたい



a n d w i s d o m p a s s e d o n



越来 治喜

(ごえく・なおき)うるま市与那城平安座在住。51歳。合資会社越来造船代表。祖父の代から続く、マーラン船の船大工。マーラン船の建造技術は、うるま市の無形民族文化財に指定。

祖父の代から続く 船大工の名手

平安座島はかつて、島内交易の中継地として知られ、島民の多くが船に関わる仕事に携わっていました。そのうるま市与那城平安座で、祖父の越来五郎さん、父親の越来文治さんと、代々続く船大工の家に生まれたのが越来治喜さん。

「幼いころから祖父や父の仕事がすぐ側で見えていましたから、いつの間にか私自身もこの仕事に就いていたという感じ。二人とも腕の立つ職人で、“仕事は見て覚えろ”という姿勢で厳しかった。船づくりを通して、いろいろなもの見方も教わりました」と、当時を振り返ります。

「父と進貢船を造ったときのこと。周りは船の土台が水平だと言うのですが、父親だけは目で見えて二分違うと反論。それで私に水平計で測らせると、父親の言うとおり。感動したのを今でも鮮明に覚えています」

経験に裏打ちされた 知恵と工夫

特に越来さんが船大工という仕事に魅せられたのが、理にかなった先人の知恵と工夫だと言います。

「船造りには自由金や差し金など専用の道具がたくさんあります。これらは無駄がなく使い勝手いいように計算されたもの。例えば、一枚の板を等分するとき、差し金を使えば全体の長さを測らなくてもきちんと分けられる。10センチだから3つに等分できないという算数の考えはない。実際道具を使えば使うほど、先人の知恵は凄いと感じさせられるんですよ」

しかし現在は木造船が少なくなり、船大工の年齢も高齢化する中で、その技を次の世代に残す必要性も指摘します。

「文化というのはその時代の流れとともに変わってきていいもの。時代に合うから文化と言えるのだと思います。ただ、伝統というのはきちんと次の時代に残していかなければなりません。マーラン船もそう、それを造る技術は次の時代に伝えていかなければならない。その役割を担っている。幸いにも、私の息子たちも船大工に興味を持っています。それが喜ばしいことです」

息子と一緒に マーラン船を造るのが夢

越来さんの長男、勇喜さんは高校卒業後に船大工になり、15歳の二男、治人さんも休日には父親を手伝います。

「私が船大工になってほしいと言ったことはありませんが、父や私の仕事をしっかりと見ていたんだと思います。ただ、これからどんどん経験を積んで立派な船大工になってほしい。私が受け継いだ技を、彼らに引き継いでいきたいです」

「私の夢は、息子たちと一緒に16メートルのマーラン船を造ること」と、目を輝かせて話す越来さん。祖父、父、そして息子たち一。四世代をつなぐ壮大な夢は、近い将来必ず実現されることでしょう。

data:

合資会社越来造船
電話/098-977-7421

